くつわ

イチ

ブルズアイは死んだ。
リディア、オートゥイコーン、ダグスも宇克の柔らかな草の上に斃れた。
右後脚を撃たれたマレンゴは、気を失った大尉を乗せて星空の下を二〇マイル駆け続けたが、とうとうイリ河沿いの塹壕に潜むそきらの兵士に見つかった。その兵はよろめく黒馬の背に揺れる士官に気づき、そして引き金を引いた。弾は凍結星のような黒馬の肩へ吸い込まれてゆく。マレンゴは冷たい夜露を散らしてどうと倒れた。散兵は足を引きずり、疲労と恐怖で大きく胸を上下させる馬の元へ、呻く乗り主を見下ろし煙草を一服。暫しの静寂はマレンゴの喘ぎと怒声の谺を抉り込んだ。温血は地中に染み込み、紫煙は冷たい夜闇へ手繰られてゆく。配給の弾は二発で済んだ。
穏やかな草丘の向こうを泥と血の炎が照らし、笛のような尾を引く悲鳴が風に乗って聞こえてくる。しかし最期の呼吸が冷えていくのは静かにまたたく星空の下だ。
こうして、一度も軍靴を血で汚す事なしに逃げ帰るところであったラティジジエリ一等兵は、幸運にも士官を討ち取る戦果を得た。ついでに彼は息絶えた主人を引きずりながら当て所なく戦場をうろつく私を見つけ、その足を休めて悠々と朝日が差し込む後方キャンプ地へ戻ったのだった。
「良い馬じゃないか、エリ？」
ラティジジエリは私の背にブラシをかける手を止めて、同輩の男を見た。
「ああ」
「脚が太い。まかぬの馬だろう。まったく、みんなが言ってる通りだな」
途端にラティジジエリは狼狽して立ち上がった。私は彼が罪悪感に耐えきれぬ弱い男だという事を既に知っている。
「おれはあんたがやる奴だって分かってた。あの〝赤掌のノック〟と撃ち合って勝てるのはあんたぐらいだよ」
「そうかな」
「なあ、そきらに帰ったらどうするつもりなんだ？　あんたほどの手柄を立てたのなら、まさか家の畑を継ぐなんて言わないだろう」
「畑は兄貴が継ぐよ。これと言っては決まっていないが…でも、そうだな、年金を元手になにか商売でも始めるかな」
ラティジジエリは二発の弾(一つは馬の肩、一つは士官の腹)が飛び出た経緯をあのどろりとした夜に閉じ込め、有りもしない決闘話をでっち上げているのだ。

どんな銃でも立ち所に使いこなし、赤々と積み上がった死体の山から使える銃を失敬して戦い抜いた忽米の戦いでの逸話が残るノック大尉と一対一の激闘。生死の縁で生ける伝説からその腕を買われ、奇妙な友情を結び、見事な斑馬を受け継いだ。戦勝祝いの酒の席で皆を魅了したこの武勇伝が、真っ赤な嘘であることを私は知っている。

訓練のない日にも毎日馬舎に現れて林檎をくれた私のエリビル少佐が榴弾の余波で落馬し、そのまま頭が割れて単なる重りとなってしまったあの黄い夜に、仁義を通した英雄譚が紡がれた筈はないのだ。あの夜闇で出会った一兵卒は私と少佐を辛うじて繋いでいた革縄を外して、私の背に乗ると遺体を残して早駆けさせた。あの場には顔の潰れた名の無いからだが、名誉に逃げられ歯噛みしていた。

その日の夜も宴会だった。

ささやかな喧騒のうねりが私の背を伝って地に染み込んでいく。この土地は最早彼らのものだ。いや、わたし自身も今では彼ら、そきらの馬なのだ。土地の所有者など私には関係のないこと。変わってなんかいない。私の少佐がそばにいないだけだ。

ああ、貴方が私の名を口にするのをもう一度聞けたなら！　馬には再現できぬあの甘美な響き。私のエリビルの喉の痙攣、歯が擦れて舌が優しく突き放す。そして唇を震わせて、（ウースマ・リノ・グァ）と私を誘う。温かな牧場、静かな木漏れ日、光り輝く湖畔。そこには私の愛するエリビルと、彼が愛した斑馬のみだ。右後肢、右前肢、左後肢、左前肢。どうも気を抜いて勢いよく脚を振ると外股歩様ぎみになってしまう。

と、緩やかなうねりが怒号とガラスの割れる音にひびついた。耳をそばだてると、二人の男が言い争って――おや、一人はあの一兵卒らしい。彼らはぼつぼつ話しながらこっちに歩いてくる。馬舎の前で立ち止まった。

「おれが…おれが、逃げ帰っただと？　よくもそんな出鱈目を。お前こそ、目も耳も塞いでただ丸まってただけじゃないのか」

「やあ、エリ、怒んなよ。ただちょっとばかし聞いてみただけじゃあねえか。驚いたんだ、養成学校でのお前と戦場でのお前はまるで別人みたいだからさ」

ラティジジエリは地団駄を踏んでわめいている。私のエリビル少佐は滅多に酒を飲まなかったし、ここまで取り乱すことも無かった。

「お前は俺が羨ましいのだ。だから俺の腕前を邪推しているのだろう。実際に見たら、俺の実力を実際に見たら、お前もわかるだろう」

賢明なる告発者は待っていたかのように声を張り上げた。

「それならば！　お前がそうとまで言うならば、見せてもらうほかあるまい。赤掌の勇士には遠く及ばんが、俺に納得させてくれ」
　途端にラティジジエリは言葉にならない口ごもりを垂れ流す。
「俺の手袋を拾ってみろ」
　挑戦者は繰り返す。「拾ってみろよ」

　ぱあん、と音が緊迫をつんざき、私の視界にラティジジエリ一等兵が飛び込んできた。
「マダラ、来い。来い」

　夜の帳が下りる。陽光の最後の一雫が遠くまかぬの逃亡者を暴く。罪悪感と恐怖に侵され、遠大な夢も財産もなく、彼にはこの盗んだ馬しか居ないのだ。
　哀れなラティジジエリ。細やかな見栄は彼を破滅へと導きその幼い傲慢が悪泥に彼を縛りつけた。彼にはその重荷はとても耐えられまい。哀れな悪辣漢、債務者、人非人。彼は何も悪くない。弱いだけなのだ。
　この森の外に逃げ道は無い。百門の都市宇克の劫掠は暫く続き、ここら一帯は富に餓えたそきらの残党狩りで溢れかえるだろう。彼の身柄にその価値が無いがために森中への捜索が無いだけなのだ。

　私たちが出会ったあの夜のように、彼は後悔と恐怖に駆られて嗚咽を繰り返す。私のエリビルはこんなふうに泣くことは終ぞなかった。私はどうしようもなく見境のない信頼と愛情に突き動かされて草原をひた走る。肢体に力が漲り背後にしがみつく小さな生命のじっとりした重さが私の歯車にかちりと噛み合い、そしてまわり始めた。私は肉体を忘れて永遠に走っていられると思った。
　近づく森の一体何が、柔らかな彼の心を傷つけることになるのだろう。そしてその時、私は再び彼を背に乗せ彼の遁走を代わることはできるのだろうか。

　森が近づく。逃れの地であり、やがては彼を苛む地。
　森が近づく。
　夜の帳が下りる。